



# 東北の鉄を追いかけて 【古・クロガネ】展(岩手県立博物館)

## 中鉢美術館、『涌谷7000年の歴史』につながってきた

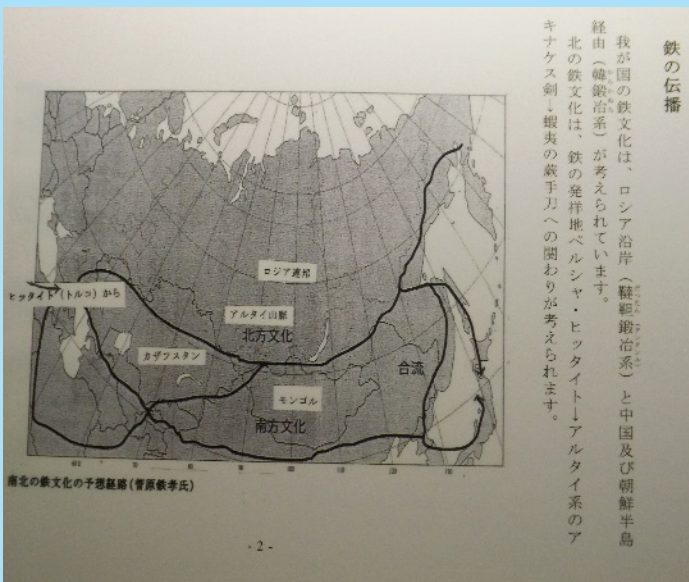


現在の日本列島への鉄の伝播ルート定説図

**東北の鉄製造探索の旅は中鉢美術館から開始**  
当新聞による東北の鉄製造探索の旅は、宮城県の岩出山にある『中鉢美術館』から始まる。いまから六年以上前のことである。そこでは、現在の日本ではほとんどの人がいぶかしがるにちがいない日本刀の



【古・クロガネ】展



鉄の北方伝播ルート図(中鉢美術館)

ルーツが東北にある説を取り上げた。ほとんどの日本人が、刀と鉄の技術は、朝鮮半島経由でもたらされたと思いついでいるから、この「異説」を受け入れることはないからである。全国に散らばる日本刀鍛冶のルーツも東北にあることをそのときに知った。加えて、なぜ全国に刀鍛冶が

散らばっているのかについてもそのときに知った。日本刀が東北で誕生して後に倅因(ふしゅう)として中央権力により全国に強制移住させられた刀鍛冶たち、また時代が下り、鎌倉幕府などにより強制移住、あるいは拉致された刀鍛冶たちが、全国各地で日本刀づくりを開始したのだ。なぜこの説に納得したか



砂鉄による鉄製造工程

### 鉄の原料

鉄は、自然界では砂鉄や鉄鉱石などの鉱物中に、多くの不純物と共に酸化鉄として存在しているため、鉄を得るには製錬が必要となります。古墳時代に伝来した製鉄技術では、当初の原料は鉄鉱石でしたが、日本では豊富な資源の砂鉄に徐々に替わりました。砂鉄は、沢や川により浸食された花崗岩に含まれるものが、流れたまま「川砂鉄」や「浜砂鉄」を用いたものと考えられます。

砂鉄が日本の製鉄の始まりではないのか

### たたら製鉄

たたら製鉄とは、朝鮮半島から伝来した鉄鉱石を木炭の燃焼で還元する製鉄技術を基に、日本では豊富な砂鉄を用いるようになり、古代から近世にかけて、効率的に生産性を高めるための技術改良が繰り返され、発達した日本独自の製鉄法です。「たたら」とは、踏輪と書き、元々送風装置を指す言葉でしたが、今では製鉄炉、製鉄を行う場所、そして製鉄全体を指す広い意味で使われています。

砂鉄(Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) + 木炭(C) + 酸素(O<sub>2</sub>)  
↓ 燃焼  
砂鉄(FeO)・一酸化炭素(CO)  
↓ 還元  
鉄(Fe)・二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)  
鋼・鉄鉄

たたら製鉄は日本オリジナルだった

といえ、日本刀の緩やかに湾曲する形状は、技術的に直刀からは作れないこと、最初から湾曲していること、朝鮮半島経由の刀はすべて直刀であることが具体的に示されていたからである。また全国の著名な刀鍛冶の名前と出身地を調べた結果、東北に行き着くケースが大半であるからであった。しかし元々の日本刀の東北

ルーツは忘れ去られ、あたかも朝鮮半島から、西日本へと鉄と日本刀技術が伝わったかのようにずっと教えられてきた。こと日本刀に関しては、歴史教育の東北軽視に静かな憤りを感じたことを、いま当時の紙面を見ながら思いつく。とはいえ、そのときは依然として、日本刀の素材加

工技術である鉄の加工技術がどこから、いつもたらされたのかは依然として不明であった。それが、のどに刺さった小骨のように忘れられずに時間が経過していった。

**『涌谷7000年の歴史』で鉄技術を出した**  
表の意識からは消えていた東北の鉄であったが、ひよんなことかと思いついた。岩手県立博物館は、盛岡からバスで三十分以上かかる場所にある。ずいぶん離れた場所にあるので、来場者も少ない。しかし『古・クロガネ』展という名前に惹かれて先月末に訪れた。

思ったより小さなスペースだったが、たくさんパネルが並べてあった。そのなかの当紙面にあるパネルから、筆者なりにいくつかの発見をした。鉄製造の素材は、現在では鉄鉱石だが、日本列島の鉄製造のスタートは砂鉄というオリジナルな素材を用いた。たたら製鉄とは、この砂鉄を用いた日本独自の製鉄技術であり、朝鮮半島伝来の方法ではない。そして、これらのことから筆者は考えた。朝鮮半島から鉄鉱石による製鉄が伝わる以前にも、原始的な鉄製造技術が存在していたのではないかと。また、砂鉄と炭の組合せで鉄鉄(不純物を多く含む鉄塊)は簡単に作れるならば、遙か以前から日本列島には原始的なたたら製鉄が存在していたのではないかと。筆者の想像はとまるところを知らない。

それは昨年制作し、今年上映した映画『涌谷7000年の歴史』が発端である。中央から伝えられたたたら製鉄技術が、確かに宮城県北部の八世紀の涌谷町にその痕跡を残していたのだ。そして、涌谷町のたたら技術とは『別の技術』が周辺地域にあつたらしいのだ。ということは、中央政府の方式とは異なるたたら技術が、当時の宮城北部にあつたということではないか。「ミッシングリンク」が繋がってきた。

**そしていくつかの発見、岩手県立博物館へ**  
岩手県立博物館は、盛岡からバスで三十分以上かかる場所にある。ずいぶん離れた場所にあるので、来場者も少ない。しかし『古・クロガネ』展という名前に惹かれて先月末に訪れた。



## 第59回

水産業再興のための  
料理レシピ紹介

【タコとアボカドの  
ぜいたくキムチ丼】

アボカドが旨みを  
引き出しますね。（松本談）



郷土料理愛好家  
松本由美子氏

『材料』 タコ 150 g、アボカド 1個、めんみ小 1/2、ごま油小 1/2、キムチ 40 g  
『作り方』 ① タコは7mmの薄切りにする。アボカドは皮をむき、種を除いて2cmの角切りにする。キムチはあらく刻む。② ボールにタコ、アボカド、めんみ、ごま油を入れてあえる。③ 丼にご飯を盛り、②をのせ青味を添える。  
タコとクリーミーなアボカドをキムチの辛味と旨みが包み込んで、美味しいです。（松本談）

### 次回の【第40回 三陸酒海鮮会】ご案内

電子タブロイド新聞【東北復興】が主催させていただく第40回目の被災地復興支援企画【おいしい復興支援(9/21)開催】のお知らせです。あの3月11日の東日本大震災発生から満8年以上を経過しました。最近ではメディアに登場する機会もめっきり減少してまいりました。しかし被災地はまだまだ復興しているとはいえない状況でございます。そしてまた、今後10年、20年という長期スパンで復興を考える必要があると考えております。そのため、支援する側もそれに呼応し、従来の援助的な支援とは異なった、日常生活にしっかりと立脚し、肩肘張らずに比較的容易に出来る息の長い支援の形が求められていることと思っております。

記

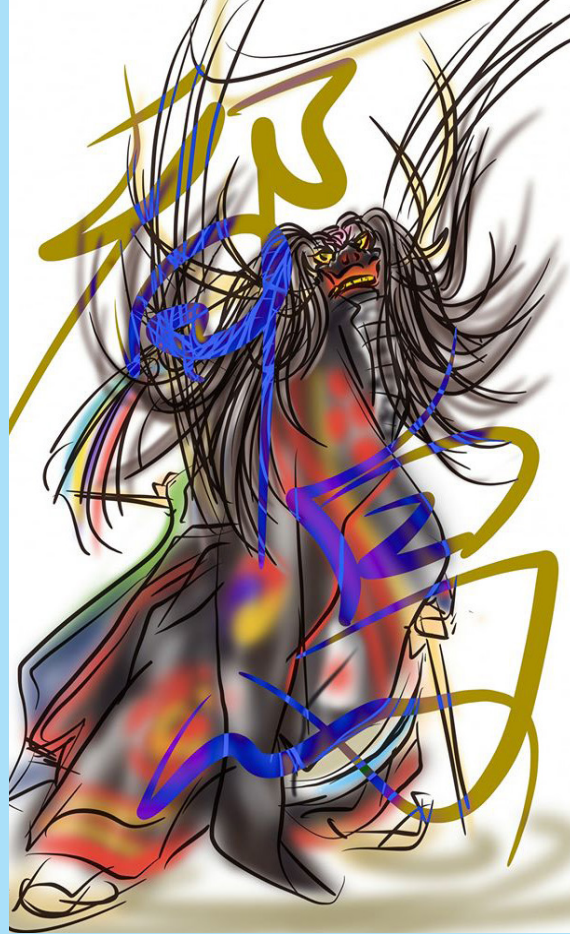
1. 日時 令和元年9月21日(土) 16:00～19:00
2. 場所 焚火家渋谷店 渋谷区渋谷 1-15-19 東口二葉ビル 1F



東北地酒ラインアップ



三陸海鮮



写真でお伝えする  
**東北の風景**  
**鹿群出陣**

写真撮影  
尾崎匠



# 東北の人口減少をどうするか

## 地方と東京の関係性

地方のことを論じる際に無視できないのが、地方と東京並びにその周辺地域との関係である。東京とその周囲にある神奈川県、埼玉、千葉を合わせて「東京(都市)圏」と言うが、東京圏の人口は実に三、五四万人。日本の人口の三割弱が居住している計算になる。これは世界の都市圏の中でも文句なしに最多であり、一つの都市圏に三、〇〇〇万人を超える人が住んでいる地域は、東京圏以外にはインドネシアのジャカルタ(三、二八万人)があるだけである。

## 東北における人の出入り

では、この人口の移動による社会増減はどれくらいあるのだろうか。国立社会保障・人口問題研究所の「第八回人口移動調査」の結果から見てみよう。まず宮城県を見てみる。二〇一七年には東北各地から四、九五六人の転出があったが、それを上回る五、三三七人が東京圏に転出しており、差し引き四〇一人の社会減である。これを見ると、宮城県における東京圏への人口流出を堰き止める防波堤の役割は、残念ながら限定的であることが分かる。

東北の各県についても見てみる。青森県は二〇一七年に東北他県(恐らく大半は宮城と思われる)に一、七二二人の転出があるが、

東京圏にはその三倍超の三、七五六人が転出している。岩手県は東北他県に八七七人が転出、東京圏にはやはりその三倍近い二、六一一人が転出している。福島県は東北他県には九五八人が転出、東京圏にはその五倍超の四九七五人が転出している。秋田県は東北他県には一、一三五人が転出、東京圏にはその倍の二、二八八人が転出している。

山形県は東北他県に八四一人が転出、東京圏にはその三倍近い二、四〇〇人が転出している。つまり、宮城を除く東北五県は、エリア内への転出の二倍から五倍の数の人が東京圏に転出しているのである。自然減に加えてこの社会減によって人口減に一層拍車がかかっている。

日本全体の人口が減少する中で東京圏の人口だけが増加し続け、一方で東北など地方の人口は社会減によって一層人口が減る、という状況が続いている限り、東京の一極集中の解消など絵空事でしかない。

被災地からの避難行動である。これに対して翌二〇二二年以降は東北以外からの転入者が多い。東京圏への転出も二〇一二年は一転して一八八八人と減少している。このグラフは転入と転出の差を見ているので、これは単に宮城県から東京圏への転出が減ったということを示している。

宮城を除く東北五県は、エリア内への転出の二倍から五倍の数の人が東京圏に転出している。自然減に加えてこの社会減によって人口減に一層拍車がかかっている。

宮城を除く東北五県は、エリア内への転出の二倍から五倍の数の人が東京圏に転出している。自然減に加えてこの社会減によって人口減に一層拍車がかかっている。



Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

大友浩平 (おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブローグ」  
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/

からの避難行動である。これに対して翌二〇二二年以降は東北以外からの転入者が多い。東京圏への転出も二〇一二年は一転して一八八八人と減少している。このグラフは転入と転出の差を見ているので、これは単に宮城県から東京圏への転出が減ったということを示している。

ていて、被災地からの避難者が秋田に転入したことが窺える。山形はその傾向がさらに顕著で、二〇一一年の東北他県からの転入が一、七七〇人に上り、翌年も転出者数を打ち消すくらいの出者数があった。恐らくは隣県の福島からの避難者が山形を頼ったということなのだろう。

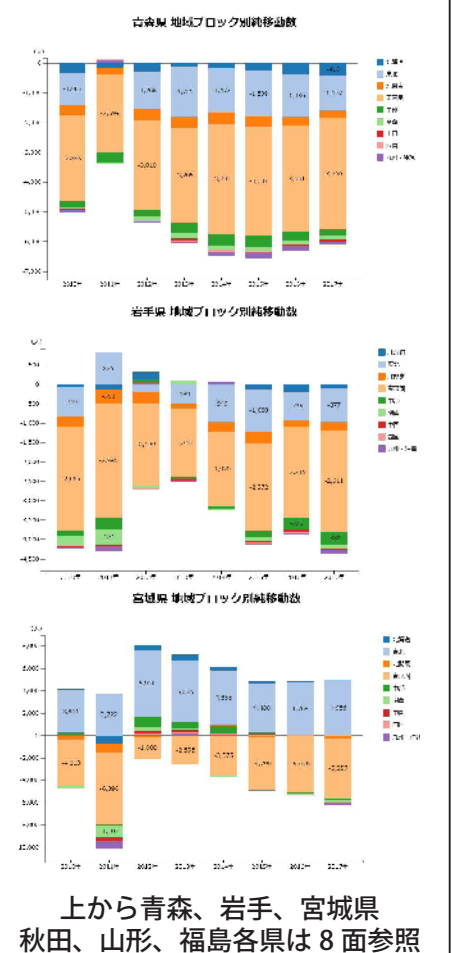
福島は傾向がガラリと変わっている。二〇一三年以降は傾向がガラリと変わり、他地域からの転入が増え、東京圏への転出者数も減って見える。ここからは他地域からの支援者が岩手、宮城よりも遅れて福島入りしていることが分かる。

東京の出生率が低いということは、統計的に見て、東京に住むと子どもが生まれにくい(生めない)ということである。端的に言えば、出生率を上げたいのなら、東京に住む人の数を減らせばよい、ということになる。実際、地方の出生率が高い傾向がある。子どもを生み、育てたかったら地方に住もう、と

いうことが言えそうなのが、ここで困ったことがある。地方と言っても、東北は東京ほどではないにせよ、出生率がそれほど高くないのである。宮城の一・三〇が最低だが、秋田も一・三三、岩手一・四一、青森一・四三、山形一・四八となつている。唯一福島だけが一・五三と、一・五を超えているが、西日本、特に九州と比べると特に高いというわけでもない。九州は沖縄の一・八九を筆頭に、宮崎一・七二、鹿児島一・七〇、熊本一・六九、長崎一・六八など、軒並み高い。

東京圏は、東京以外は埼玉と千葉が一・三四、神奈川県が一・三三なので、東北で言えば秋田並で、宮城よりむしろ高い。「地方に住めば子どもを生み育てられ」というのは、少なくとも宮城や秋田に関してはあまり言えなさそうである。

この点について、ニッセイ基礎研究所の天野馨南子氏は興味深いレポートを公表している。各都道府県における第一子出産時の父親の年齢、母親の年齢とその都道府県の出生率との間には強い負の相関があるというのである。父親の年齢と出生率の間の相関係数はマインス〇・七四、母親の年齢と出生率の間の相関係数はマインス〇・七一とのことである。父親・母親とも第一子出産時の年齢が高い都道府県ほど出生率が低いということができる。説明はなかなか困難であるように思われる。



七五まで回復したという。それを可能にした政策の一つが「母親資本(マテリアル・スキル・カピタル)」という制度で、これは子どもが二人生まれたら、ロシアにおける平均年収の倍ほどに住宅の購入や修繕、教育などに使えるというものである。先ほど、挙げたフランスも同様にやはり子どもが二人以上生まれた家庭への手厚い経済的保護を実施していることである。

こうしたロシアやフランスの支援策から見ると、つい先日閣議決定された「まち・ひと・しごと創生基本方針二〇一九」を見て、実に小粒な印象で、これだけ人口が増えるに違いない、との実感に乏しいのが現状である。少子高齢化の最先端を行っている日本だからこそ、ロシアやフランス並みかそれらを上回るレベルでのドラスティックな出産・子育て支援を行わなければならない。出生率に関しては期待できない。

とすれば、少子化の重要な解決策の一つは、なるべく第一子出産時の年齢を下

がるということになる。では、なぜ第一子出産時の年齢が高くなっているかと言え、晩婚化が進んでいるからである。晩婚化の理由としては、仕事との関係など様々あるだろうが、若くして子どもを持つ傾向が低いのは、経済的な不安があることが予測される。子育てに掛かる費用が高額であることは広く知られているが、一般的に若いと給与水準も低いため、その給与水準で子どもを持つことに躊躇が生まれると考えられる。そこで出産を後押しするためには、若くして生むほど、高い子育て支援金を支給するという仕組みが必要なのではないだろうか。

今この議論は第一子でいくらか、第二子でいくらか、というものが、若くして生むほど経済的な負担が相対的に大きい。のだから、若い人ほど手厚い支援が必要なのである。

# 「巨人」へ静かに立ち向かった二人の東北人の事

奥羽と中央。その古代からの因縁の関係は、現代の東北と東京との関係にまで連なっており、無論切っても切れないものである。その関係の形は個人でも異なりながら、各々の心の中に自分の姿に重ねられる、あるいは指針となる先人や模範となる人物が存在するのではないだろうか。

筆者にとっても、郷里より上京する際、そして東北へ帰ると称して仙台へ移住する際、常に心の中に二人の人物の影があった。その二人とは、現・青森県弘前市出身の今和次郎。そして現・岩手県遠野市出身の佐々木喜善。ともに明治生まれで今和次郎が二歳だけ

年下の、全くの同時代人である。実は彼らには、同時代を生きた東北人である他にいくつかの共通点がある。既成の職業概念に当てはまらないが、上京四目に筆を執る者としての「民俗研究者」の一言で表現されるその生き方、そして共にそう呼ばれる理由でもある共通の「師」柳田國男という「知の巨人」の存在。加えてその師に対して見せた静かなる反骨精神である。

本稿では、中央によってその真価を見出されながら奥羽人独特の試練に晒された二人の生き様に焦点を当て、東北に生まれた者としての先の未来にも問われるであろう存在意義について考えてみたい。



奥羽現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

の決して知名度の高くない人物が短時間ながら銀幕に登場した事は今考えても極めてユニークな試みだった。巨大都市東京をそれまでにない視点で掘り下げた、『帝都物語』は筆者のよ

うな田舎者の多くを上京に駆り立てた作品だったに違いないが、上京四目に筆を執る者としての「民俗研究者」の一言で表現されるその生き方、そして共にそう呼ばれる理由でもある共通の「師」柳田國男という「知の巨人」の存在。加えてその師に対して見せた静かなる反骨精神である。

本稿では、中央によってその真価を見出されながら奥羽人独特の試練に晒された二人の生き様に焦点を当て、東北に生まれた者としての先の未来にも問われるであろう存在意義について考えてみたい。

筆者が今和次郎を知ったのは高校時代に映画『帝都物語』を観た事に始まる。博覧強記で知られる作家・荒俣宏による小説の映画化で、明治から昭和に渡る東京を舞台に、当地の鎮守であり怨霊としても知られる平将門の力で都市の破壊を目論む魔人の暗躍を描く異色のファンタジーである。各時代東京に活躍した実在の人物が登場するのも見どころで、幸田露伴、寺田寅彦、渋沢栄一など多彩な顔ぶれとともに描き出されたのが今和次郎である。こ

一方の佐々木喜善は柳田國男にとつて民俗学・文学両方面における初期最大の成果とされる『遠野物語』への重要な題材提供者として多くの人に知られているが、彼自身が何を生業として生きてきたかについて関心を持つ人はおそらく少ない。農商務省の若手の高等官僚だった柳田と出会い、郷土の昔話を語って衝撃を与えた当時の喜善は新進の作家として活動するも一介の大学生であった。後に病によって遠野へ帰郷すると大出の経歴を買われて性格に合わない村の役職に就かされ、行政に失敗して生活は困窮を極める事になる。

しかしその合間にも東北各地の民話収集や研究を続け、『紫波郡昔話』『老翁夜譚』など数冊の貴重な昔話集を世に遺したのである。

さて、以上のように今和次郎と佐々木喜善が各々全く異なる人生を歩みながら「民俗研究者」として紹介される事が多いのはひとえに巨人・柳田國男の存在故であるとも言え、また彼の存在なしには両者の名は現在のように残っていないか

一方、佐々木喜善に対し柳田は『遠野物語』以後も民話の提供を催促していた。実際には喜善自身が文学者として身を立て、自分なりの民話集を出版しようと考えていたが、彼の文才を否定するように柳田は彼の原稿に朱筆を入れ、文体や内容の訂正をさせただけでなく、無駄と判断した昔話を削除させた。柳田は東京に数多くの民俗学研究を弟子として抱えたが、喜善や彼に協力する仙台始め東北各地の民俗関係者をその中には含まなかった。

遠野物語研究所の石井正己は『聴耳草紙』(筑摩書房)の解説に書く。柳田の中には地方の『蒐集』『採集』と中央の『研

究』という分担があったに違いない。その中央・地方の格差、差別的扱いに喜善は徐々に息苦しさや反感を募らせていったのではないかと石井氏は言うのである。

二人に共通するのは、柳田國男という知の巨人が己の民俗学を国家事業と位置づけるが故に「避けて通るべき」部分に着目した点であった。

自らが創始したとも言える日本民俗学を新たな「国学」とすべく柳田が目指したのは西洋諸国と対等の近代国家・日本の形成に不可欠な「単一民族」としての国民的意識の統一化であった。柳田國男は生来の歴史学・民族学への純粋な興味趣向と、上流社会や行政機関に参加できるエリート資質とが備わった類稀な人物であり、自らの肩書き・能力を駆使して前人未踏の学問開拓に力を注ぐ事ができた。ところが、彼の学問はその理想とする民族国家の形成作業の前に大きな矛盾を孕む要素として立ち上がる事になったのである。

始め、柳田は九州・樺葉村や東北・遠野郷の研究で日本民俗の深遠さ、未開拓の魅力に取り付かれるが、彼は徐々に日本風土に横たわる重大な事実が気つき、自らの学問の進展に警戒心を抱き、慎重にならざるを得なくなっていく。柳田が避けて通った点と

は、民俗学においてむしろ不可避的に思える性的な、あるいは反道徳的・反体制的な話題や、日本列島が稲作で画一的に語れる風土ではないという実態「狩猟・雑穀栽培に生きる民や漂泊民、被差別民、国家以前に存在する民俗など、日本が極めて多様なルーツと歴史を持つ集団から成り立つ土地である」という事実だった。

彼は民俗学を「高尚なる」国学に育てる為に、意識的にその学問と著書から猥雑な、しかしながら重要な事実の多くを除外してしまっただけである。

さて、柳田は今和次郎を破門した覚えはないと言ったが、それが事実だとすると、和次郎が敢えて破門されたのだらうか。彼は考現学についてこう定義する。

「考現学は、時間的には考古学と対立し、空間的には民族学と対立する。」注目したいのは、和次郎の視点に「本流に對立する」という意識が強く働いている事だ。本流、即ち権威あ

るアカデミズムは現代から古代、都市から辺境という距離を置いた、一段高い視線から研究が為されるが、和次郎のフィールドは常に己の生きる時代と場所であった。日本人という己自身を知る為の学問には、肝腎の現代の都市に生きる自らを研究対象として自ら丸裸になる覚悟が必要なのではないか。アカデミズム出身でない彼自身、考現学が柳田國男という巨人の業績に對等に渡り合うものと見做される事は到底ないだろうと自覚していたに違いない。その上で尚、静かに、しかし確実に己の反骨を示さずにはいられたのであった。

佐々木喜善もまた、柳田ら中央の研究者とは決定的な視点の違いを有していた。前出の石井正己は書く。「佐々木には、昔話はなくなっていくばかりではなく、これからも生まれてくるという未来への志向があった。しかし、それは昔話を神話の零落と考える柳田とは相容れないものだった」

私は、何かかそのような喜善の業績に魅かれて仙台にやってきたのである。決して「本流」のように表舞台には立てずとも、彼らを取りこぼした真に描くべき「本質」を掴む生き方。東北人の、哀しくも誇り高きその一面は、これから生きるこの地の人々にとつても決して意義を失わぬ宝として輝き続けるに違いない。



早稲田大学建築学科教授時代の今和次郎



カマツカ (ウシコロシ)



エゴのハナ



ハナショウブ



マイズルソウ



モウセンゴケ

あのときの冷夏は米の大不況をもたらし、タイ米の輸入で人々の記憶にまだ生々しく残っている。異常に寒い夏だった。それにしてもこの頃の不安定な気候は、身体への影響もあるが、それ以上に精神的に憂うつになってくる。そうしたときに安定をもたらしてくれるのが花々である。気候変動を乗り越え、きれいな花を咲かせ、人々の心を落ち着かせる。

大騒ぎが大好きなメデアの一部からは、今から二十六年前の冷夏との類似を指摘する声が聞こえてくる。

暦では「小暑」だが、この季節の気温とはとても思えないような肌寒さが続いている。

シリーズ 遠野の自然  
「遠野の小暑」  
遠野 1000 景より



コバイケイソウ



雨上がりのサルナシ



ミズチドリ

# 【海鮮屋】 仙台国分町 三陸海鮮と 東北地酒堪能



三陸魚介の刺身



ホヤ



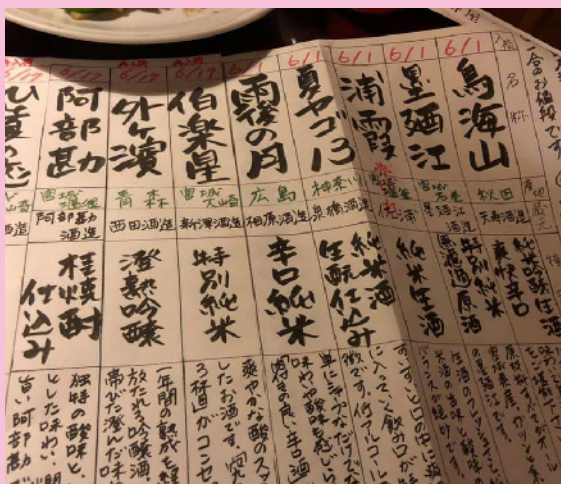
岩ガキ



牛タン



涌谷 おぼろ豆腐



東北地酒ラインアップ

先月末の東北ミニ旅行のついでに訪ねた宮城県仙台市の海鮮と東北地酒の居酒屋『海鮮屋』を紹介する。きっかけは、仙台市に在住の筆者の従弟と会食する機会があり、従弟の馴染みの居酒屋に出かけることになって訪れた店である。

お店の選定にあたっては、美味しい海鮮と美味しい東北地酒と指定してあったので、店名もそのまんまの『海鮮屋』。歓楽街で有名な国分町にあるお店である。

店主さんに勧められるまに頼んだ海鮮は、まずは旬のホヤ、三陸の魚介の刺身、岩ガキ、そして仙台といえは牛タン。どれもボリューム満点で、しかも美味しい。

それから筆者の故郷の涌谷のおぼろ豆腐。このメニューがあることにも、そこで食べられることにも驚いた。

東北地酒は、ラインアップを眺めて、これまで味わったことのない銘柄を選んだ。

まずは、宮城の『阿部勘』。すっかりした日本酒の印象。次は同じ宮城の『ひと夏の恋』。ネーミングがしゃれている。さわやかな夏の酒。

さらには、メニューに載っていない新潟の『雄町50』。すっきりした風味の酒。最後は、青森の『外ヶ濱』。どれも美味しい。

たつぷりと三陸海鮮と東北地酒をいただき大満足。また出かけたいたいお店だ。



外ヶ濱



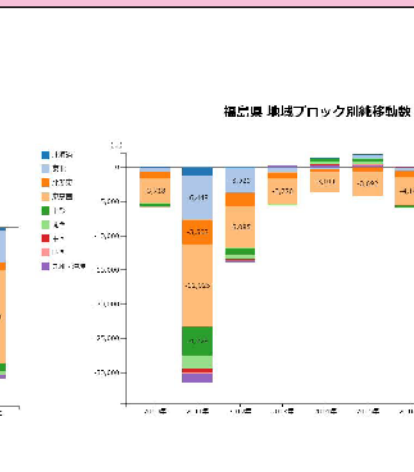
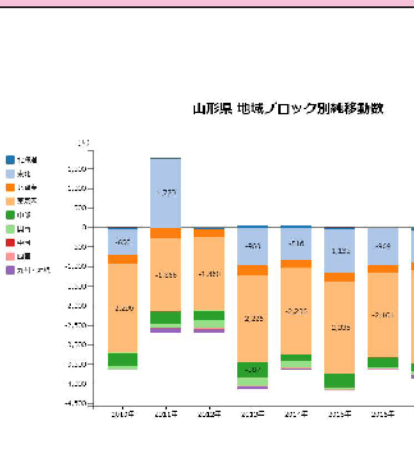
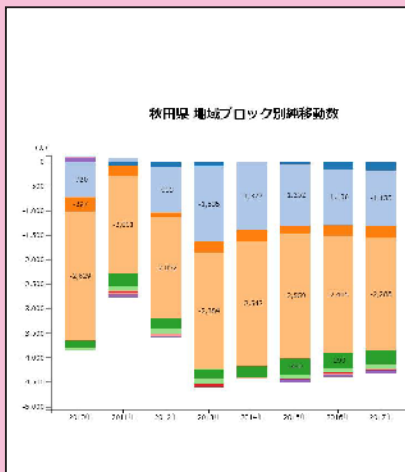
雄町 50



ひと夏の恋



阿部勘



5面記事  
付属グラフ  
左から  
秋田県  
山形県  
福島県